

## 「白」の観念的な美しさ

心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花 凡河内躬恒

訳：当てずっぽうに折るならば折ってみようか。真っ白な初霜が降りて、白菊の花と見分けがつかなくなっているから。

菊が美しく、寒い朝には、初霜も見られる季節となりました。菊は奈良時代に中国から伝わり、貴族たちは競って栽培し、鑑賞しました。当時の菊の花は、小ぶりで、白か黄色でした。「延命草」とも言われ、長生きの薬としてお酒に入れて飲んだり、枕に入れて楽しんだりしました。

この歌は、初霜の降りた朝、霜の白さに白菊の白さが紛れて、見分けがつかない様子を詠んでいます。これについて、明治時代に写実的表現を好んだ正岡子規が「初霜が降りたくらいで、白菊が見えなくなるはずはない。嘘の趣向である。」と批判したことで有名です。でもその一方で、観念的な誇大な表現によって、身の引き締まるような、冴えわたる美しさを表現することに成功していると感じる方もいるでしょう。あなたはどう思われますか？

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ